スビン・オフ小説　あんたはすごい！

水本爽涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スピン・オフ小説　あんたはすごい！

【Ｎコード】
Ｎ３１３０Ｘ

【作者名】
水本爽涼

【あらすじ】
時間研究所に登場した塩山満のスピン・オフ小説。

第４３回

ママはおかわりのグラスを私の前へ置く。いつの間にか遠くのボックスに座っていた早希ちゃんが私の右側へ移動していた。仄かな甘く芳しい香水（パヒューム）の匂いで気づいたのだ。

「では、私はこれで…」

急に沼澤氏が席を立った。えっ、このタイミングで？　と、三人の目は沼澤氏に釘づけになる。

「これで、よろしいですか？　お釣りはいいので、と云いたいところなのですが、なにぶん、稼ぎが最近、少ないものでして…。そういうことで、余った分は次に回しといて下さい」

店を退く頃合いの判断が絶妙で、私にはとても真似など出来ない…と、白旗を上げた。私の場合、ついつい長居してしまう癖があった。

沼澤氏が万札をママに手渡して店を出た後、残された三人は、心にぽっかり穴が開いたような空虚感に苛（さいな）まれ、しばらくは無言であった。

「今度は、いつ来られるんでしょうね？」

「それが分かんないから困るのよぉ～」

ママに訊くと、迷惑ではないものの、どうも気楽に話せず難儀している、とのことだった。私もママの気持が分からないではない。沼澤氏がいる場合だと敬語で話さねばならないし、気兼ねもするから、確かにママが愚痴るのは的を得ていた。

「私はあまり好きなお客のタイプじゃない」

早希ちゃんの強力なカウンターが炸裂し、沼澤氏は撃沈した。恐らくは、店を出た夜道で、くしゃみをしていることだろう…と、私は笑みを浮かべた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3130x/

スビン・オフ小説　あんたはすごい！

2012年1月2日00時49分発行